

地方に定住するフィリピン人のボランティア活動の意義

The Meaning of Volunteering for Filipino Residents in Regional Japan

光野百代

Mitsuno, Momoyo

大分県立芸術文化短期大学

Oita Prefectural College of Arts and Culture

キーワード：地方の定住外国人、フィリピン人労働者の移住、ミドルクラスの形成、市民的関与

1. 報告の目的

地方に定住する外国人が主体となり運営するボランティア活動（以下、ボランティア）が、自分達のコミュニティを形成するだけでなく、定住先の地域社会において認められ、受け入れられる過程において、当事者のボランティアに対する考えはどのように関与するのか。本報告は、進行中の質的調査から、移住労働者と日本の雇用者をつなぐ役目を担う定住外国人グループのボランティアに対する考えとその実践を報告する。

調査の対象は、九州で20年以上にかけて、地域及び近隣の県に住むフィリピン人への支援活動を主にボランティアを行ってきたフィリピン人が運営する団体（以下、A団体）である。A団体は2015年より地元のハローワーク、介護福祉士養成施設、等と協働して団体のメンバーが介護士として就職するプロジェクト（介護プロジェクト）を実施している。さらに2019年より、A団体が運営するフィリピンの日本語学校、メンバーが経営する移住労働者の送り出し機関、そして家族・親戚と連携しながら、日本で就職を目指すフィリピンの学生に奨学金を支給し、上述の介護福祉士養成施設等へ派遣し、日本の医療機関・福祉施設へ就職させるというプロジェクト（日本語プロジェクト）を開始している。

ボランティアは市民的関与を示す行動と位置づけられるが、その参加者はミドルクラスの背景を持つというステレオタイプがボランティア研究で議論される。一方で、外国人の市民的関与は、ボランティアではなく、社会運動や対抗的公共圏の形成といった領域において議論されてきた。本報告は、市民的関与という概念を社会的な形態（ボランティア）と政治的な形態（アクティビズム）とに分け、A団体のボランティアに対する考えや意味付けに注目する。道徳的、社会的価値が付けられるボランティアを通して、A団体が地域社会に受け入れられるだけでなく、フィリピン人の直面する問題に取り組むことを活動の主とすることから、ボランティアの意義が主体的に形成される過程を考察するためである。そのために、本報告はA団体の役員が考えるボランティアの意義と認識されるボランティアの受益者を検討する。

2. 研究の方法

本報告は、地方に定住するフィリピン人のボランティアについての現在進行中の質的調

査に基づく。まず、A団体の活動について最初に行った約半年間の観察を基に、運営の中心となる団体の役員5人にボランティアの経験に関する質問を中心とした1時間～3時間の半構造化面接を行った。次に、面接で得た役員ボランティアの考えに対して、実際の活動に関する情報を収集した。一つはA団体のさらなる観察である。もう一つの情報源は、A団体が発信する、公開されたSNSのページ上のメッセージや写真である。(非公開のページに対して、)公開されたSNSには、A団体が認識する団体やメンバーの「成功」の出来事や活動の様子が発信される。特に写真はA団体が認識する価値を具体的なイメージとして伝え、誰に対して利益となる活動なのかについてを可視化させている。

質的調査を行う報告者の立ち位置を述べると、A団体にも外国人に関するボランティア団体にも所属していない。また、調査開始の時点では、フィリピンについての知識も殆どなく、面接はお互いに相手のことを詳しく知らない段階で行われた。一方で、報告者は草の根レベルのボランティアに参加した経験があり、ボランティアに対して通常は肯定的に捉えている。

3. 考察

面接と観察から、A団体が考えるボランティアの意義と実際の活動には対応が見られた。まず面接では役員個人の成長の経験が報告され、他のフィリピン人定住者と区別される優位性をA団体がボランティアから認識していることが示唆された。認識される成長には二つのパターンが見られた。一つは、「(以前に比べて自分が)怒らなくなった」「目的をもって行動する」「(他のフィリピン人は)我慢ができない」といった内容に反映されるように、自律的な行動に関する認識である。もう一つは、「ボランティアは勉強になる」「コミュニケーションが大事」「旦那が(A団体の活動に)理解してくれるようになった」といった、他者の視点を認識した報告である。さらに面接の内容から、A団体の他の定住者との線引き、優位性が最初から存在していたわけではなく、地域内で築かれてきた人間関係の中で、高齢を迎える自分の立ち位置を解釈する定住者の視点から報告されていることが示唆された。

次にA団体の活動は、役員が考える自分たちの優位性を反映したものであることが観察された。定住者が直面する問題の解決のに向けた支援活動がA団体によって行われてきたが、それは自分達の利害関心を提起する対抗的活動には発展していない。むしろ、支援活動はフィリピン人やフィリピンに対する地域でのイメージの向上に向けて展開されてきた。このことは、A団体が地元の行政機関やNPOと共に協働して活動し、地元のメディアで肯定的に取り上げられてきた結果に具体化される。一方、SNSの投稿では、次の世代を迎える立場にA団体の役員を位置付ける情報が発信されている。介護士や技能実習生として来日するフィリピンの若者に対して、介護士のメンバーや役員がロールモデルとして、そして、心の支えとなる「家族」「親」のような存在として提示されている。

A団体の事例を市民的関与という概念を用いて考察すると、外国人の市民的関与は社会運動や対抗的公共圏という形態で現れるのではなく、フィリピン人の経済的自立に関心を

向けたボランティアという形で登場していることが示唆される。つまり、A団体のボランティアはメンバーの（経済的、社会的）生活改善を支援する実用的なものが大半であるが、それは日本語の能力や地域のコミュニティ、雇用者とのつながりなど、生活改善に必要な文化的、社会的資源の重要性に対する役員の認識を反映することが面接と観察から示唆される。さらに、生活改善を目指すボランティアは、定住者としてこれまで直面・経験してきた問題に対してA団体が考える理想的定住者像に価値付けられており、単純に経済的・物質的改善のみに向けられた活動ではない。このことから、フィリピンの若者を対象とした「日本語プロジェクト」が、単なる労働者移住の支援でなく、日本の地域社会で高齢を迎えるA団体の役員が定住者として築いてきた知恵や経験、地域とのつながりを次世代の定住者に受けついでもらう活動として機能している可能性が考えられる。

参考文献

- 関恒樹. (2009). トランスナショナルな社会空間における差異と共同性：フィリピン人ミドルクラス・アイデンティティに関する考察. *文化人類学*, 74(3), 390-413.
- 高谷幸. (2009). 脱国民化された対抗的公共圏の基盤 非正規滞在移住労働者支援労働組合の試みから. *社会学評論*, 60(1), 124-140.
- 仁平 典宏. (2005). ボランティア活動とネオリベリズムの共振問題を再考する. *社会学評論*, 56(2), 485-499.
- Villegas, C. M. (2019). The middle class as a culture structure: rethinking middle-class formation and democracy through the civil sphere. *American Journal of Cultural Sociology*, 7(2), 135-173.